

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

平成 8 年度

八千代市教育委員会

例　　言

1. 本書は、八千代市内に所在する、上谷津台南遺跡、二重堀遺跡、上ノ山遺跡、神久保寺台塚、ヲイノ作南遺跡、逆水遺跡、内込遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 調査は、八千代市教育委員会が平成8年度市内遺跡発掘調査事業として国庫及び県費の補助を受けて実施した。(No.1 上谷津台南遺跡については、平成7年度事業。)
3. 調査遺跡の所在地、期間、調査原因は下記のとおりである。

No	遺跡名	所 在 地	調査期間	面 積	調査原因
1	上谷津台南遺跡	上高野1105ほか	7.12.18 ～8.2.2	3,266m ² ／32,200m ²	土地区画整理
2	二重堀遺跡	上高野字新林1120-1ほか	8.5.13 ～8.5.31	500m ² ／4,942.29m ²	共同住宅建設
3	神久保寺台塚	神久保寺字ノ台70-1,73-3	8.5.30 ～8.6.14	65m ² ／130m ²	土砂崩壊防止工事
4	上ノ山遺跡	萱田町字上ノ山883-2ほか	8.6.6 ～8.6.12	236m ² ／2,354.68m ²	共同住宅建設
5	ヲイノ作南遺跡	大和田新山貞光寺野937-1	8.6.27 ～8.7.15	280m ² ／2,800m ²	宅地分譲
6	逆水遺跡	米本字逆水1233ほか	8.11.14 ～8.12.13	504m ² ／2,414.52m ²	堆肥化処理施設設置
7	内込遺跡	八千代台北17-14	8.12.10 ～8.12.18	305m ² ／2,340m ²	宅地分譲
8	二重堀遺跡	上高野字二重堀1240-1ほか	9.2.28 ～9.3.7	450m ² ／2,750.02m ²	宅地分譲
9	上谷津台南遺跡	上高野字大野1305	9.3.7 ～9.3.13	361m ² ／3,613.50m ²	宅地分譲

4. 整理作業及び報告書作業は平成9年2月20日から3月24日までの期間行った。
5. 本書の執筆は、常松・森がⅠを、森がⅡ-2・4・5・9を、宮沢がⅡ-1・3・6・8を、秋山がⅡ-7を行った。
6. 本書の出土遺物の写真撮影は宮沢が行った。

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 各遺跡の概要	4
1. 上谷津台南遺跡	4
2. 二重堀遺跡	11
3. 神久保寺台塚	12
4. 上ノ山遺跡	15
5. ライノ作南遺跡	17
6. 逆水遺跡	19
7. 内込遺跡	25
8. 二重堀遺跡	26
9. 上谷津台南遺跡	28
報告書抄録	38
調査組織	39

挿図目次

第1図 市内遺跡位置図	3	第16図 神久保寺台塚土壘状遺構実測図	14
第2図 上谷津台南遺跡位置図	4	第17図 上ノ山遺跡位置図	15
第3図 上谷津台南遺跡遺構配置図	5	第18図 上ノ山遺跡遺構配置図	16
第4図 上谷津台南遺跡土層断面図	6	第19図 ライノ作南遺跡位置図	17
第5図 上谷津台南遺跡1号土坑実測図	7	第20図 ライノ作南遺跡遺構配置図	18
第6図 上谷津台南遺跡I-5グリッド		第21図 逆水遺跡位置図	19
出土遺物	7	第22図 逆水遺跡遺構配置図	20
第7図 上谷津台南遺跡2号土坑実測図	7	第23図 逆水遺跡2号方形周溝墓実測図	21
第8図 上谷津台南遺跡3号土坑実測図	7	第24図 逆水遺跡2号方形周溝墓	
第9図 上谷津台南遺跡I-2グリッド		出土遺物実測図	22
出土遺物	8	第25図 逆水遺跡3号方形周溝墓実測図	23
第10図 上谷津台南遺跡4号土坑実測図	9	第26図 逆水遺跡1号溝実測図	24
第11図 上谷津台南遺跡1号溝実測図	9	第27図 内込遺跡位置図	25
第12図 二重堀遺跡位置図	11	第28図 内込遺跡遺構配置図	26
第13図 二重堀遺跡遺構配置図	12	第29図 二重堀遺跡位置図	26
第14図 神久保寺台塚位置図	12	第30図 二重堀遺跡遺構配置図	27
第15図 神久保寺台塚土壘状遺構実測図	13	第31図 上谷津台南遺跡位置図	28
		第32図 上谷津台南遺跡遺構配置図	29

図版目次

図版 1	上谷津台南遺跡	30
(1)	調査前現況	
(2)	調査風景	
(3)	遺構検出状況	
(4)	遺構検出状況	
(5)	土層断面 (I - 5 グリッド西壁)	
(6)	1号土坑完掘状況	
図版 2	上谷津台南遺跡	31
(1)	2号土坑完掘状況	
(2)	3号土坑完掘状況	
(3)	4号土坑完掘状況	
(4)	1号溝完掘状況	
(5)	トレンチ出土遺物	
(6)	トレンチ出土遺物	
図版 3	二重堀遺跡・上ノ山遺跡	32
二重堀遺跡		
(1)	調査前現況	
(2)	調査風景	
上ノ山遺跡		
(4)	調査前現況	
(5)	遺構検出状況	
(3)	トレンチ出土遺物	
(6)	トレンチ出土遺物	
図版 4	神久保寺台塚	33
(1)	調査前現況	
(2)	調査前現況	
(3)	調査風景	
(4)	塚状遺構現況	
(5)	土壘状遺構現況	
(6)	塚状遺構土層断面	
(7)	土壘状遺構土層断面	
(8)	トレンチ出土遺物	
図版 5	ヲイノ作南遺跡・逆水遺跡	34
ヲイノ作南遺跡		
(1)	調査前現況	
(2)	調査風景	
逆水遺跡		
(4)	遺跡遠景	
(5)	調査前現況	
(6)	調査風景	
(3)	トレンチ出土遺物	
(7)	遺構検出状況	
(8)	2号周溝墓出土状況	
図版 6	逆水遺跡	35
(1)	2号周溝墓完掘状況	
(2)	2号周溝墓主体部完掘状況	
(3)	2号周溝墓出土遺物	
(4)	3号周溝墓完掘状況	
(5)	3号周溝墓主体部完掘状況	
(6)	完掘全景	
図版 7	内込遺跡	36
(1)	調査前現況	
(2)	調査風景	
(3)	遺構検出状況	
(4)	遺構検出状況	
(5)	トレンチ出土遺物	
(6)	トレンチ出土遺物	
図版 8	二重堀遺跡	37
(1)	調査前現況	
(2)	調査風景	
上谷津台南遺跡		
(5)	調査前現況	
(6)	調査風景	
(3)	遺構検出状況	
(4)	トレンチ出土遺物	
(7)	トレンチ出土遺物	
(8)	トレンチ出土遺物	

I 調査に至る経緯

八千代市教育委員会（以下「市教委」と略）では千葉県教育委員会（以下「県教委」と略）の指導のもと、開発業者からの埋蔵文化財の有無とその取り扱いについての照会（以下「照会」と略）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。このうち確認調査が必要と判断される遺跡については、国庫と県費の補助を受け発掘調査を実施している。

平成7年度調査

上谷津台南遺跡 平成6年8月、上高野地区土地区画整理組合設立準備委員会（以下「準備委員会」と略）から土地区画整理事業のため照会が提出された。上高野地区は過去の現地踏査や試掘などの調査から、遺構密度が比較的薄い地域と判断されていた。しかし、今回の照会面積が479,000m²と大規模であったので、詳細な踏査が必要とされた。県教委が回答する案件であったので、隣接及び近接地での照会・調査状況を含め、県教委にこの旨副申し、県教委及び市教委による現地踏査を実施した。この結果周知の遺跡の範囲内のうち、特に繩文土器等が確認された区域を中心とした184,000m²について、確認調査が必要と判断された。その後、県教委・市教委・準備委員会の三者により協議を重ねた結果、3ヵ年にわたって確認調査を実施していく方針がとられた。

初年度に当たる平成7年度の10月に、準備委員会から文化財保護法57条の2第1項の規定による土木工事の発掘届（以下「土木工事の届」と略）が提出され、調査は地権者の承諾、耕作等の関係から32,200m²について同年12月17日に開始した。

調査報告については3ヵ年の確認調査終了後に行う予定であったため、平成7年度の報告書にはこの調査について掲載しなかった。しかし、平成8年度に入り準備委員会から事業の緊急性が弱まった旨の報告を受けたため、今年度は確認調査を行わないこととし、7年度の調査概要については今年度の報告書に掲載することとした。

平成8年度調査

本市は首都圏のベッドタウンとして宅地開発が進んだ地域であるが、平成8年4月に東葉高速鉄道が開業したことにより、その沿線を中心に中小規模の開発事業が増加してきている。本年度の発掘調査はこの沿線の事業、及び市域南部の市街化区域における開発行為に伴う調査が中心であった。

二重堀遺跡 平成8年3月、岡村建設不動産株式会社から宅地造成のため照会が提出された。これを受け市教委は現地踏査を実施した上で、周知の遺跡範囲内であり隣接地の発掘調査で遺構が検出されているため、確認調査が必要と判断した。これに基づき市教委は事業者との協議を行い、5月に事業者から土木工事の届が提出されたのを受け、調査の準備に入った。現地には宅地や篠竹等の障害物があったため、撤去について検討し、宅地については住人がいるため撤去不可能であったが、篠竹等は事業者が伐採した。準備の整った5月13日に調査を開始した。

神久保寺台塚 平成8年4月、国土社から土砂崩壊防止工事のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施したところ、対象地内に塚状の盛土と土壘状の盛土を確認した。この盛土の時期と周溝を伴うものかとを判断するために試掘を実施した。その結果、周溝を伴うものではないが、中へ近世の遺構になると判断した。出土遺物は塚の方に繩文土器片（織維混入）が1点確認されたのみであった。工事目的が土砂崩壊防止という緊急性の強い案件であることを考慮し、塚と土壘のみに対する確認本調査を実施することにした。5月に土木工事の届が提出され、調査準備に入った。対象地は篠竹等が繁茂していたので、5月31日に伐採から開始した。

上ノ山遺跡 平成8年4月、中台昭から共同住宅建設のため照会が提出された。現地踏査を実施した

上で、周知の遺跡範囲内であり、隣接地で弥生時代の住居跡が検出されているため、確認調査が必要と判断した。5月に土木工事の届が提出され調査準備に入った。事業者が方眼杭打ちを行い準備の整った6月6日から調査を開始した。

ライノ作南遺跡 平成8年5月、武市弘から宅地造成のため照会が提出された。対象地内には谷があり、その谷の北側はライノ作南遺跡に続く区域であり、隣接地で遺構・遺物が確認されているため確認調査が必要と判断した。谷の南側については試堀を行ったが、遺構・遺物とも検出されず、遺跡無しと判断した。6月に土木工事の届が提出され、準備の整った6月27日に調査を開始した。

逆水遺跡 平成8年10月、八千代市畜産環境保全組合から堆肥化処理施設設置のため照会が提出された。周知の遺跡範囲内であり、現地踏査の結果隣地で遺物が確認されたので、確認調査が必要と判断した。対象地は畑地であり作物があったので、その収穫を待って11月14日に調査を開始した。

確認調査の結果、弥生時代の方形周溝墓群が確認された。当該事業は補助事業であり、年度内に工事を完了する必要があるなどのことから、早急に本調査に入らねばならず、しかも充分な調査期間をとれないなどの問題が生じた。このため11月27日に県文化課・県畜産課・千葉市庁産業課・県農業開発公社・市社会教育課・市農政課の6者による協議を行い、掘削工事が行われる部分にかかっている遺構のみを本調査し、その他については掘削工事を避けて区域内に保存するという措置で合意した。この合意に基づいて11月29日から本調査を開始した。

内込遺跡 平成8年8月、鈴木徳衛から宅地造成のため照会が提出された。周知の遺跡範囲内であり対象地には多くの遺物が散布しているため、確認調査が必要と判断した。9月に土木工事の届が提出され、準備の整った12月10日に調査を開始した。

二重堀遺跡 平成9年1月、三奈建興株式会社から個建住宅建設のため照会が提出された。周知の遺跡範囲内であり、現地踏査の結果遺物を確認したため、確認調査が必要と判断した。2月に土木工事の届が提出され、準備の整った2月28日に調査を開始した。

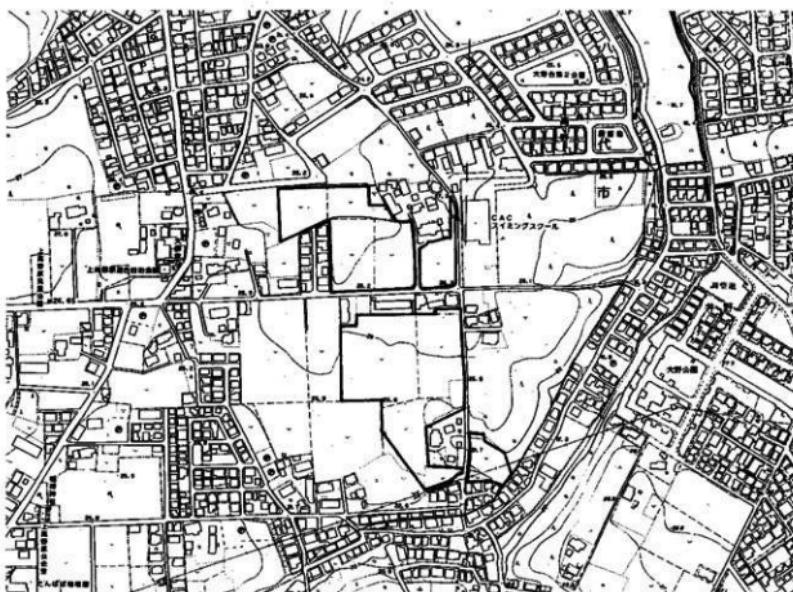
上谷津台南遺跡 平成9年1月、岩谷産業株式会社から宅地造成のため照会が提出された。周知の遺跡範囲内であり、隣接地の平成7年度の調査で遺構・遺物が検出されているため、確認調査が必要と判断した。2月に土木工事の届が提出され、事業者が方眼杭打ちを行い準備の整った3月7日に調査を開始した。



第1図 市内遺跡、位置図

II 各遺跡の概要

1. 上谷津台南遺跡（平成7年度事業）



第2図 上谷津台南遺跡位置図 S=1:5,000

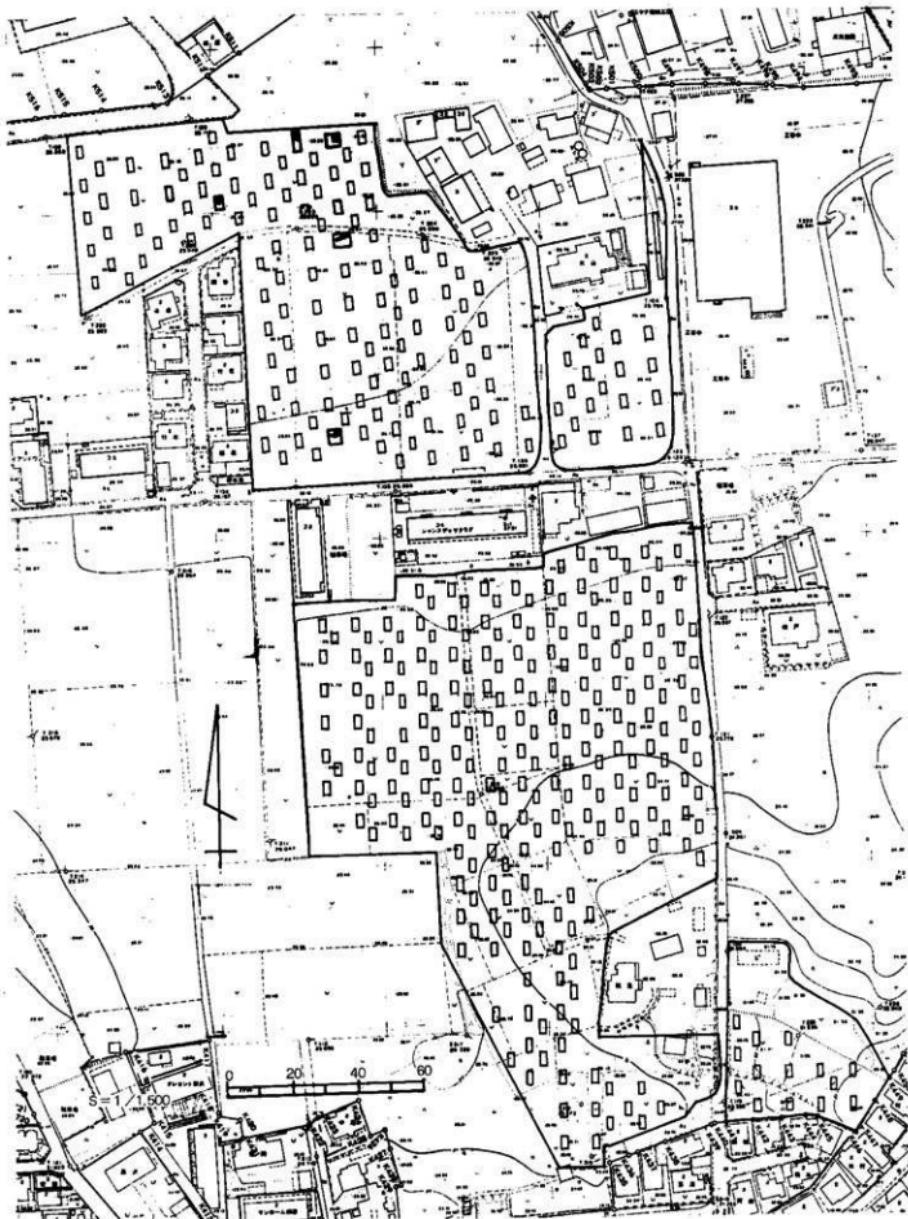
遺跡の立地と概要

上谷津台南遺跡は、佐倉市との市境を流れる井野川西岸の台地上平坦面に立地する。標高は約24mを測り、水田面との比高は約20mである。近隣の遺跡として遺跡北東に上谷津台遺跡が、同じく南西に稻荷前遺跡が展開しているが、稻荷前遺跡の南北方向の二重堀遺跡、新林遺跡では発掘調査が数回行なわれており、縄文早期の落し穴群、縄文前期の遺物包含層などを検出している。本遺跡の現況はほとんどが畠地で、現在までにこの地区において発掘調査を実施した区域は無い。今回の発掘調査において本地区の一部を明らかにすることができた。

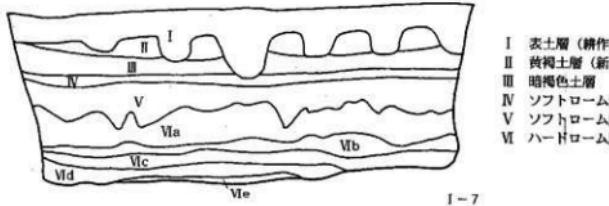
調査の方法と経過

調査区の形状に沿って10m間隔に2×4mのトレンチを設定し掘削を行い、遺構の検出状況をみながら更にトレンチを追加設定し遺構の捕捉に努めた。また検出遺構が少なかったため、遺構調査まで行い調査を終了した。

調査期間は平成7年12月18日～平成8年2月2日で、平成7年12月18日～20日機材搬入および環境整備、19日～25日方眼杭およびトレンチ設定、20日～平成8年1月10日人力による包含層確認掘削作業、1月9日～17日重機による表土除去、10日～17日遺構検出作業、18日～2月1日、本調査を含む実測・写真撮影等記録作業、2月2日機材撤収を行い調査を終了した。

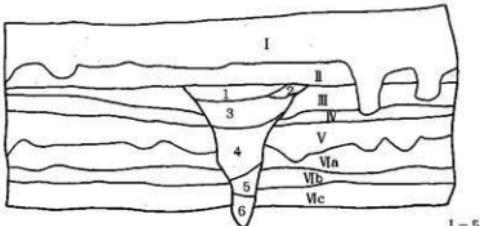


第3図上谷津台南遺跡、遺構配図



I 表土層（耕作土）
II 黄褐色土層（新期テフラ層）
III 暗褐色土層
IV ソフトローム漸移層
V ソフトローム層
VI ハードローム層

I-7



- 1 暗褐色土層 暗褐色土を主体に少量の黒色土、少量のロームが斑状に混ざる層
2 暗褐色土層 暗褐色土の均一な層
3 暗褐色土層 暗褐色土を主体に微量の無色土、微量のロームが均一に混ざる層
4 暗褐色土層 暗褐色土を主体に微量の黒色土、微量の黒色土が混ざる層
5 暗褐色土層 暗褐色土を主体に少量の無色土、少量のロームが混ざる層
6 黑褐色土層 黒褐色土を主体にしながらも、多量の暗褐色土が混ざる層。
多量の炭化物を含む。

I-5

第4図 上谷津台南遺跡 土層断面図 S-1:40

調査の概要

調査区の基本層序は、I 表土層（耕作土）、II 黄褐色上層（新期テフラ層）、III 暗褐色土層、IV ローム漸移層、V ソフトローム層、VI ハードローム層（AT 層）、VII ハードローム層（第二暗色帶）となっている。遺構検出作業はIV層下層～V層で行なった。現況が畠のため、擾乱が激しく、表土層下に本来あると思われる黒色土層は検出されず、大部分のグリッドでは表土直下35cm程度でソフトローム層に達し、またハードローム層の下層に白色粘土層を部分的に検出したグリッドもあった。

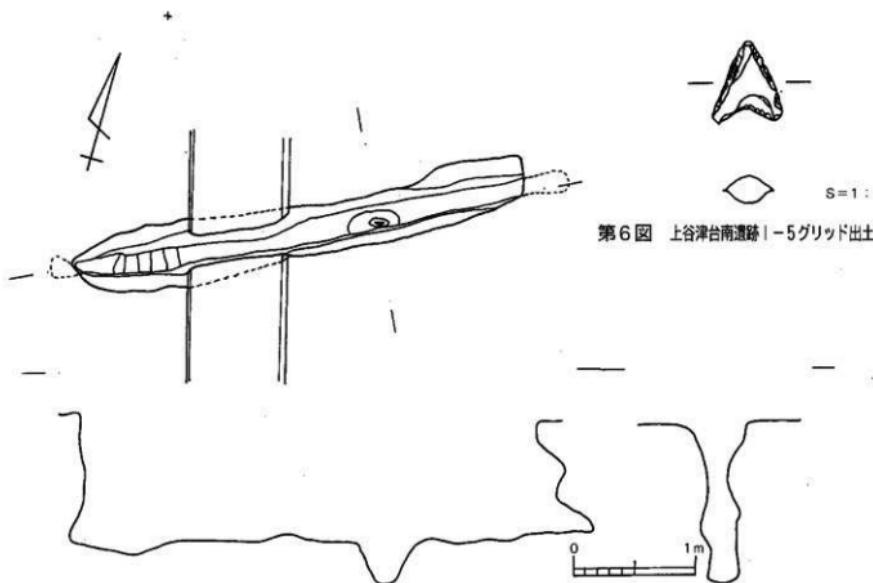
調査の結果、縄文時代の落し穴と思われる土坑2基、時期・用途不明の土坑2基、時期・用途不明の溝1条を検出した。遺物は縄文土器少量、石器（磨製石斧1点、石錐1点）等検出した。遺構・遺物とも検出状況は「疎」である。遺物の傾向をあえてあげるとすれば、調査区南側に縄文後期の土器が比較的多く出土していた。旧石器時代については9箇所36m分のテストピットを調査したが、遺物は検出されなかった。以下、検出された遺構についての調査所見を述べることとする。

1号土坑

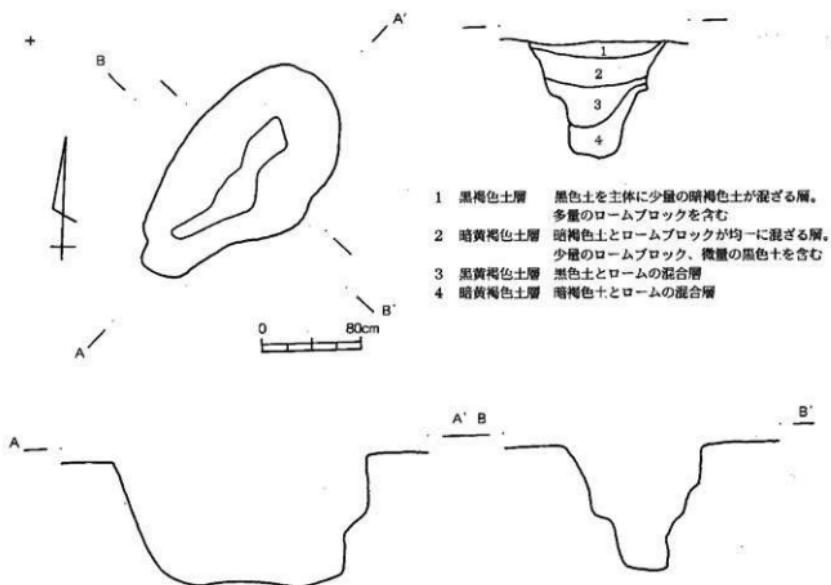
I-5グリッド（以下Gと略）に位置する。遺構検出はIII層下面からIV層上面で行なった。平面形態は細長い楕円形で、長軸3.62m、短軸0.40mを測り、坑底での長軸は4.25m、短軸0.19mを測る。立ち上がりは、ほぼ垂直に立ち上がり、壁上部で漏斗状に広がる。また、長軸方向はオーバーハングしている。底面の状況は、ほぼ平坦である。底面中央での深さは確認面より約1.1mであるが、本来1.2mほどの深さだったと思われる（I-5 土層断面図参照）。底面にはピット1基を伴い、形態は42×15cmの楕円形で、深さ約36cmを測る。形態から判断して縄文早期の落し穴と思われる。

土坑内覆土は、6層に分けられ、最下層の6層については人為的な埋め戻しが想定されるが、5層から上層は自然堆積による埋没土と思われる。

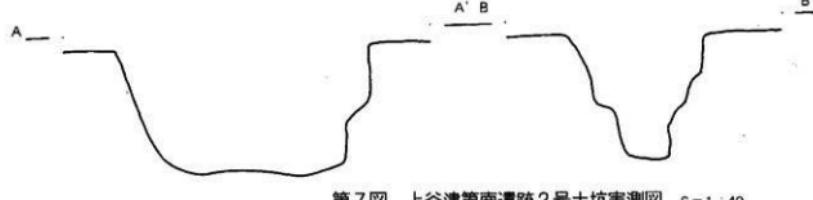
本土坑から遺物は出土していないが、遺構検出の際にI-5 Gの1号土坑付近から黒耀石の石錐を検出している。本土坑に伴うものかどうかは明らかではないが、示唆に富む出上例である。



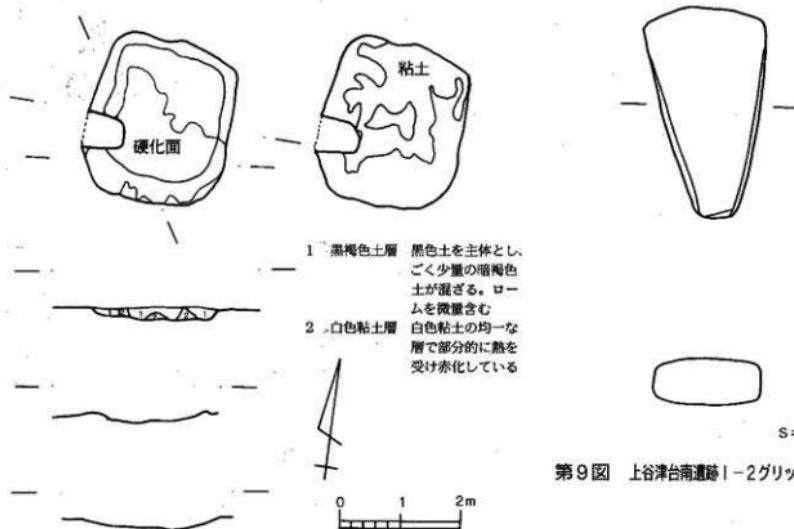
第5図 上谷津台南遺跡1号土坑実測図 S=1:40



第6図 上谷津台南遺跡1-5グリッド出土遺物



第7図 上谷津第南遺跡2号土坑実測図 S=1:40



第8図 上谷津台南遺跡3号土坑実測図 S=1:40

第9図 上谷津台南遺跡I-2グリッド出土遺物

2号土坑

H-11Gに位置する。遺構検出はIV層で行なった。平面形態は南北に長い楕円形で、土坑南側は擾乱を受けている。長軸2.03m、短軸1.14mを測り、坑底での長軸は1.27m、短軸0.32mを測る。壁は斜めに立ち上がり、オーバーハングしている部分も見られない。底面の状況は、ほぼ平坦である。底面中央での深さは確認面より約1.03mを測る。底面に小穴等の付属施設は検出されなかった。

1号土坑同様、縄文時代の落し穴と思われる。

土坑内覆土は、4層に分けられ、いずれも人為的な埋め戻しが想定される。

本土坑から遺物は出土しなかった。

3号土坑

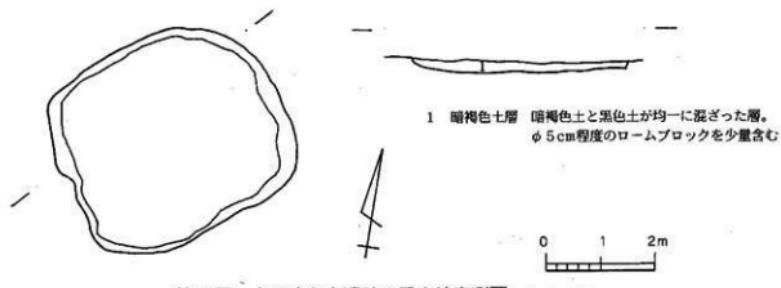
I-2Gに位置する。遺構検出はIV層で行なった。平面形態は南北にやや長い圓丸長方形で、かなり擾乱を受けている。長軸1.35m、短軸1.16mを測る。底面の状況は皿状を呈し、硬化面が広がる。立ち上がりは、皿状の底面からそのまま斜めに立ち上がる。深さは最も深い部分で確認面より約10cm程度の浅い土坑であった。底面に小穴等の付属施設は検出されなかった。

時期・用途不明の土坑である。

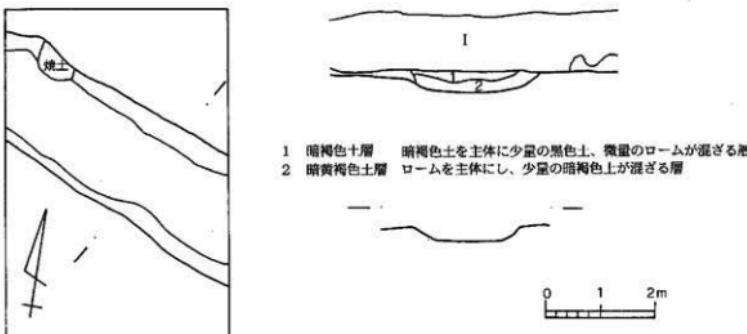
また、底面直上には白色粘土が広範囲に検出された。粘土の状況は、粘性は欠けるが粒子の均一な粘土が広がり、部分的に熱を受け赤化していた。粘土の厚さは5~10cm程度で平面的には不規則な広がりを見せる。

土坑内覆土は、2層に分けられ、いずれも人為的な埋め戻しが想定される。

本土坑から遺物は出土していないが、I-2Gの遺構検出時に本土坑北側付近から小形の磨製石斧が出土している。



第10図 上谷津台南遺跡4号土坑実測図 S=1:40



第11図 上谷津台南遺跡1号溝実測図 S=1:40

4号土坑

E-3 Gに位置する。遺構検出はIV層で行なった。平面形態は隅丸長方形で、長軸2.0m、短軸1.8mを測る。底面の状況は、おおむね平坦である。立ち上がりは、斜めに直線的に立ち上がる。深さは、最も深い部分で確認面より10cm程度の浅い土坑であった。形態・規模的には、3号土坑に類似している。底面に硬化面、小穴等の付属施設は検出されなかった。

3号土坑同様、時期・用途不明の土坑である。

土坑内覆土は、1層であった。

本土坑から遺物は出土していない。

1号溝

H-2 G位置する。遺構検出はIV層で行なった。幅0.98mを測り、東西方向に延びている。底面の状況は、おおむね平坦である。立ち上がりは、斜めに直線的に立ち上がる。深さは、確認面より10cm程度の浅い溝であった。底面に硬化面、小穴等の付属施設は検出されなかった。

時期・用途不明の溝である。

また、溝北側壁際で焼土を検出している。暗褐色土にじむように広がる焼土範囲で、強く熱を受けたような痕跡は認められなかった。

溝内の覆土は2層に分けられ、自然堆積によるものと思われる。

本遺構から遺物は出土していない。

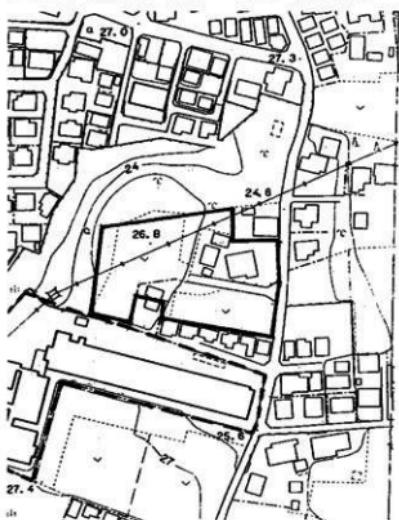
調査のまとめ

今回の調査により、初めて上谷津台南遺跡の様相を知ることができた。32,200m²の確認調査に対して検出した遺構数は5基と少なく、住居跡の検出がされていない。こうした傾向は、上谷津台南遺跡に限らず、近隣の新林遺跡、二重塁遺跡、市域中央を流れる新川に面する沖塚遺跡にも共通して言えることである。さらには、僅かながら検出されている遺構は縄文時代の落し穴が主体的ある（註1）。また居住域としては、二重塁遺跡南西部に縄文時代前期の遺物包含層が確認されているのみで、現在のところ積極的な確証を得ていない。このことは、この地域が縄文時代においては主に狩猟の場として利用されていたことを想起させる。こうした仮定を証明するためには、この狩り場を利用していたと思われる縄文人の居住域の確定、落し穴等狩猟の場を裏付ける遺構のさらなる検出など、なおまだ時間のかかる問題であると思う。いずれにしても、今後の上谷津台南遺跡を含め周辺遺跡の資料の蓄積を待ち、縄文時代の土地利用の在り方と合わせて考えて行きたい。

今回の調査では、検出遺構・遺物が少ないながらも、八千代市域西南部における縄文時代遺跡の在り方について情報を得ることができ、また、今後の上谷津台南遺跡およびその周辺遺跡の調査に対して新たな課題を設定できた点に意義があると言えよう。

註1 八千代市教育委員会 「市内遺跡発掘調査報告 平成6年度」 1995年3月31日
「平成6年度 八千代市埋蔵文化財年報」 1995年3月31日
「八千代市埋蔵文化財年報 平成6年度版」 1996年3月29日

2. 二重堀遺跡（以下 平成8年度事業）



第12図 二重堀遺跡位置図 S=1:2,500

調査期間は平成8年5月13日～同年5月28日で、5月13日～14日方眼杭及びトレンチ設定、14日～27日人力による遺構確認及び包含層調査、16・20日重機による表土除去、24日基本層序等写真撮影、実測作業、27・28日下層確認調査、28日一部埋め戻し、機材撤収を行い調査を終了した。調査終了後に重機による全体の埋め戻しを行った。

調査の概要

本遺跡の基本層序は、I 表土（根等による擾乱層）、II 黒色土（腐食土層）、III 暗褐色土（新期テフラ層）、IV 暗褐色土、V 暗黄褐色土（ソフトローム漸移層）、VI ソフトローム層となっている。遺構確認作業は包含層の存在も考慮して、重機でIII層上面まで下げIII層以下を人力により掘り下げた。最終的にV～VI層上面において遺構確認を行った。

調査の結果、遺構ではないが、風倒木痕と考えられる自然の落ち込みを検出した。遺物は前期浮島式興津式、中期五領ヶ台式、後期加曾利B式の土器小片が少量出土している。出土層位はIII層下位となっている。

調査のまとめ

上高野地区は相対的に遺構、遺物の密度が薄い状況にある。この中で二重堀遺跡は、遺物の分布については少なからず包含している。平成5年4月に調査を実施した二重堀遺跡は、その主体となる部分で今回はその北側隣接地を調査した訳である。遺構としては上坑等の展開が予想されたが、台地先端部に少量の土器片を確認したのみであった。結果としては、二重堀遺跡の北側における限界といえるのではないか。

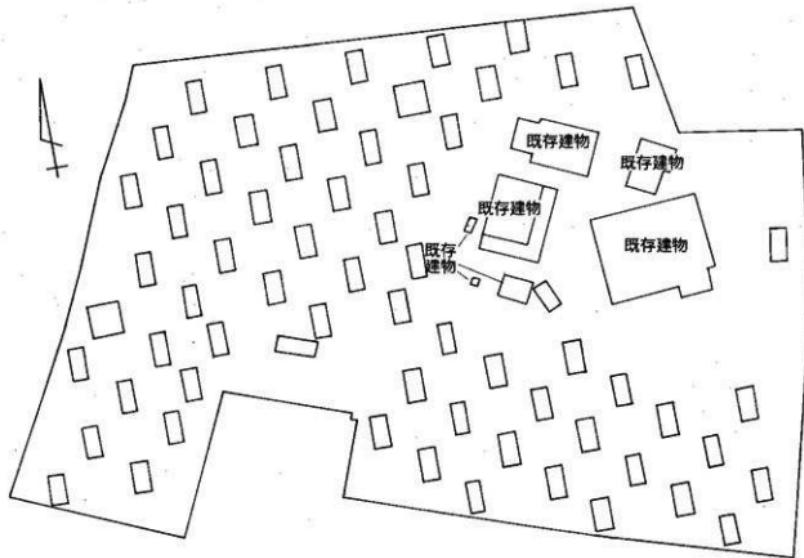
遺跡の立地と概要

二重堀遺跡は市域の南東部、新川と井野川にはさまれた台地のほぼ中央部にあり、新川に至る谷の最奥部、標高24～27mの台地上に立地する。

本遺跡の周辺では、南側に隣接して平成5年4月に調査を実施した二重堀遺跡と更にその南側隣接地で平成6年12月に調査を実施した新林遺跡が所在する。二重堀遺跡では縄文時代前期浮島期を中心として竪穴遺構1基、土坑35基を検出している。新林遺跡では縄文時代の土坑1基を検出している。両者とも調査面積が5,000m²以上とまとまっているにもかかわらず、遺構密度、遺物点数とも薄い状況から今回の調査においても同様の結果が想定された。

調査方法と経過

調査は基本として磁北の方向で10m間隔にトレーニング(2m×4m)を設定し、適宜その間にトレーニングを設け遺構確認を行った。なお既存の家屋部分では、敷地内で任意にトレーニングを設定した。



第13図 二重堀遺跡遺構配置図 S=1:600

0 5 10m

3. 神久保寺台塚



第14図 神久保寺台塚遺跡位置図 S=1:2,500

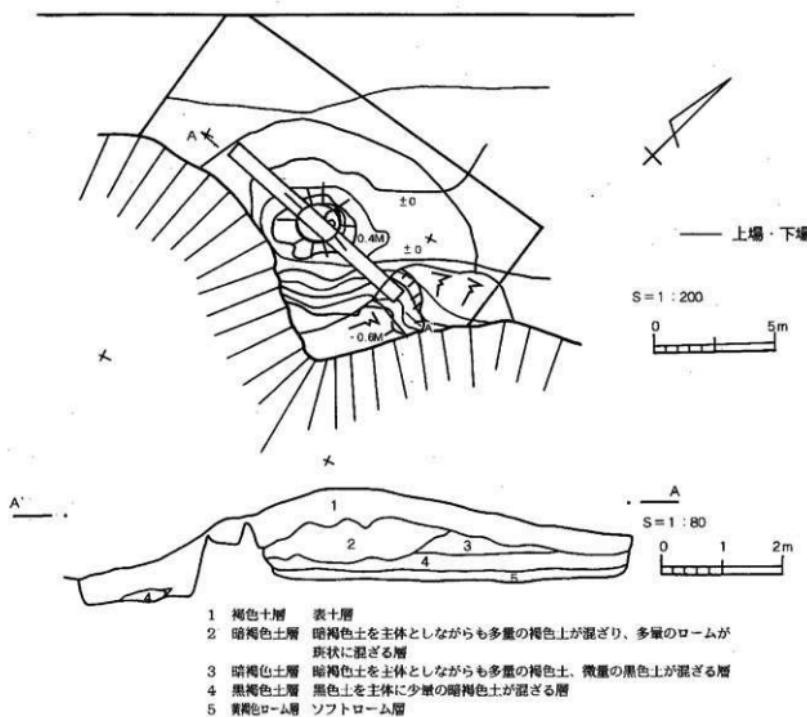
遺跡の立地と概要

神久保寺台塚は、神崎川を北に臨み、樹枝状に谷津が発達した台地くびれ部平坦面に位置する。標高は約20mを測り、水田面との比高は約10mである。近隣の遺跡として遺跡南側に夏刈山遺跡、椿山遺跡島田台向原遺跡、西側に原内遺跡、庚申前遺跡、同じく北側に妙正神遺跡、神久保塚群、谷を隔てた東側に真木野遺跡が展開している。現況は山林で、現在までに隣接地においても発掘調査は行なわれていない。

調査の方法と経過

調査は調査区内に存在する塚状遺構および土壌状遺構の性格を明らかにすることを目的とし、セクション調査および現況測量を実施した。

調査期間は平成8年5月30日～平成8年6月14日で、5月30日～31日機材搬入および環境整備、6月3日～6月11日現況測量、6月5日～6月12日セクション調査、6月13日～6月14日機材撤収を行い調査を終了した。



第15図 神久保寺台塚塚状遺構実測図

調査の概要

調査区は、工事用道路の切り通しによって南北に分断され南側には塚状遺構が1基、北側には上層状遺構が1基確認されている。中心部が工事用道路によって削平されてしまっているが、遺構が近接しているため、本来は有機的につながる一連の遺構だった可能性もある。以下、それぞれの遺構についての調査所見を述べることとする。

塚状遺構

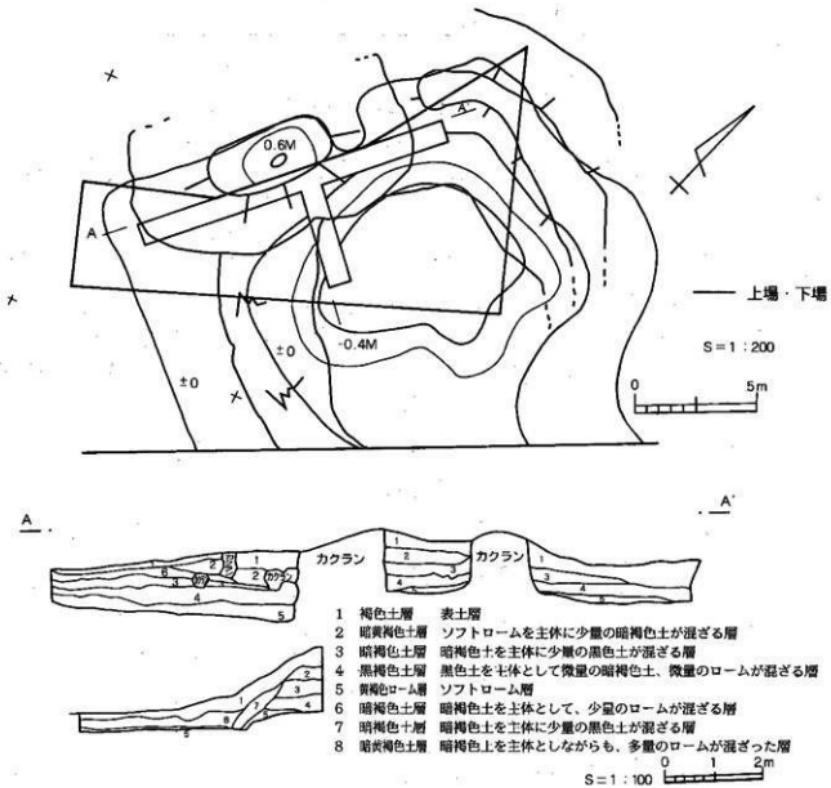
切り通しの南側に位置し、塚の南側は崖になっており、塚の三分の二は削半されていた。形状は径約11mの不整円形で、現況での高さは約1mである。また、塚東部には塚を切り土してテラス状の平坦面がある。現況等から判断して現代のものではなく、少なくとも塚築造後、塚としての機能が失われた後、何らかの目的のために、塚盛り土を切り土して平坦面を作り出したように思われる。

塚盛り土は4層からなり、4層黒褐色土層が旧地表面で、塚築造のために一部整地等が行なわれたものと思われる。樹木による擾乱が激しく良好なセクションを観察することができなかったが、いずれの土層もしまり具合は弱く、丹念に積み上げ築造した状況は見られなかった。また、塚平坦面の築造方法についても擾乱が激しく、セクションからは決定的な結論を導くことはできなかった。

盛り土下から主体部等の遺構は検出されなかった。

時期・用途不明の塚である。

遺物は塚盛り土中から縄文土器が5点出土したのみである。



第16図 神久保寺台塚土壘状遺構実測図

土壘状遺構

切り通しの北側に位置する。現況で、幅約6.5m、高さ約1.2mの土壘で調査区内南西から北東に伸び調査区北側で南東に折れ曲がっている。土壘のコーナー部に当たる部分は土壘が一部途切れていって、あたかも出入口の様相を呈していた。また、土壘に囲まれた中央部は他の地表面より低く平坦であった。

塚盛り土は、7層からなり4層黒褐色土は自然層で、土壘築造時に切り土されている。先に記述した塚状遺構と同様、樹木による攪乱が激しく良好なセクションを観察することはできなかったが、いずれの土層もしまり具合は弱く、丹念に積み上げ築造した状況は見られなかった。また切り土は5層ソフトローム層まで及んでいて、トレーニングの完備状況もそれを示していた。このことからも、土壘中央部の平坦面は土壘築造時に旧地表面を切り土して作り出したものと思われる。

盛り土下から主体部等の遺構は検出されなかった。

時期・用途不明の土壘である。

遺物は土壘盛り土中から砾石が1点、縄文土器が2点出土したのみである。

調査のまとめ

今回の調査は、調査面積も少なく、時期を決定できる遺物にも恵まれなかつたため、塚および土墻の性格を明らかにしえなかつた。土墻は調査区外にも伸びており、他の土墻や溝も確認しており、これらとの関係も大いに気になるところである。いずれにしても、今後、周辺の調査類例を増やし合わせて考えていくたい。

4. 上ノ山遺跡



第17図 上ノ山遺跡位置図 S=1:2,500

遺跡の立地と概要

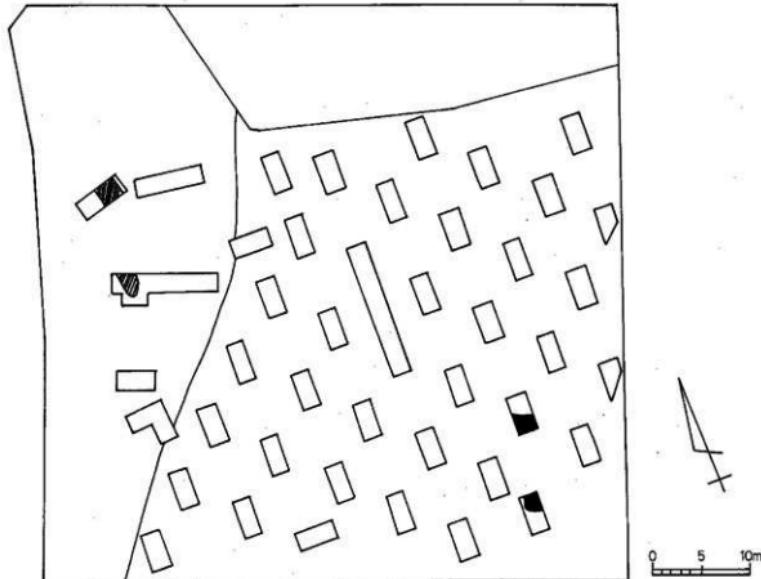
上ノ山遺跡は市域の南部、新川の西岸にあり、標高24mの舌状台地上に位置している。

本遺跡は北側及び南側隣接地において以前本調査を実施している。北側は昭和62年3月、確認本調査を実施し、弥生時代後期の竪穴住居跡2軒が検出されている。また、南側は平成6年2月、確認調査を受けて本調査が行われた。結果として北側と同じく弥生後期の住居跡2軒を検出している。

調査の方法と経過

調査は基本として座標に沿って10m間隔にトレンチ ($2\text{ m} \times 4\text{ m}$) を設定し、適宜その間にトレンチを設け遺構確認を行った。なお緩斜面については任意にトレンチを設定した。

調査期間は平成8年6月6日～同年6月14日で、6日トレンチ設定、10日重機による表土除去10日～12日遺構確認作業、下層確認調査等、13日



第18図 上ノ山遺跡遺構配置図 S=1:600

器材撤収、14日バックホーによる埋め戻しにより調査を終了した。

調査の概要

基本層序は、Ⅰ耕作土、Ⅱ暗黄褐色土（ソフトローム層）となっている。斜面部においても表土下はローム層となっている。耕作土が深かったため、遺物包含層は全く存在しなかった。

調査の結果、弥生時代後期の住居跡2軒、時期不明の溝状遺構1条を検出した。住居跡の覆土は耕作によるカクランが深く及んでいたため判別がむずかしい状況であったが、黒褐色土にローム粒を少量混入した層でよくしまっていた。確認面での遺物出土はほんの数片であったが、平面形が隅丸方（長方）形を呈していたため、以前の調査による知見もあり弥生時代後期と判断した。溝状遺構は幅2.0～2.2m深さ45cmを測る。覆土は黒褐色土の單一層でよくしまっている。断面形状は浅いU字形を呈する。ほぼ同じ等高線を南北方向に走り、南側で立ち上がっていいる。遺物は出土せず時期不明。

本遺跡の出土遺物は、表採のものを含めても極めて少量である。縄文時代中期、後期、弥生時代後期の付加条縄文を施文した土器片、古墳時代後期の有段丸底形状の土師器壊小片等である。

調査のまとめ

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡2軒を検出した。今までの北側及び南側の調査成果を合わせると計6軒となる。遺物については縄文～古墳時代後期を通じて極少量の出土が認められるが、その主体となるのは弥生時代後期である。遺構は弥生時代後期の竪穴住居跡のみの単純な構成となっている。遺跡は更に東側に広がるが、表採遺物からは今回と同様の遺構展開になることが想定される。

5. ライノ作南遺跡



第19図 ライノ作南遺跡位置図 S=1:2,500

遺跡の立地と概要

ライノ作南遺跡は市域の南西部、桑納川南岸に至る谷の最奥部にあり、標高22~24mの台地上に立地する。

本遺跡では北側隣接部分において、昭和63年5月（本調査）、平成7年3月及び11月（確認調査）、平成8年8月（前年確認調査の内、一部本調査）に調査を実施している。調査面積は全体で21,000m²に及ぶ。遺跡の時代は縄文時代前期の黒浜式を主体としており、竪穴住居跡24軒、落し穴状遺構等のピット40基以上を検出している。本遺跡では台地先端部と隣接の南側平坦部では遺構密度、遺物の出土量も多いが南及び東に進むと極端に少ない状況となっている。

調査の方法と経過

調査は基本として磁北の方向で10m間隔にトレチ（2m×5m）を設定し、適宜その間にトレチを設け遺構確認を行った。

調査期間は平成8年6月27日～同年7月15日

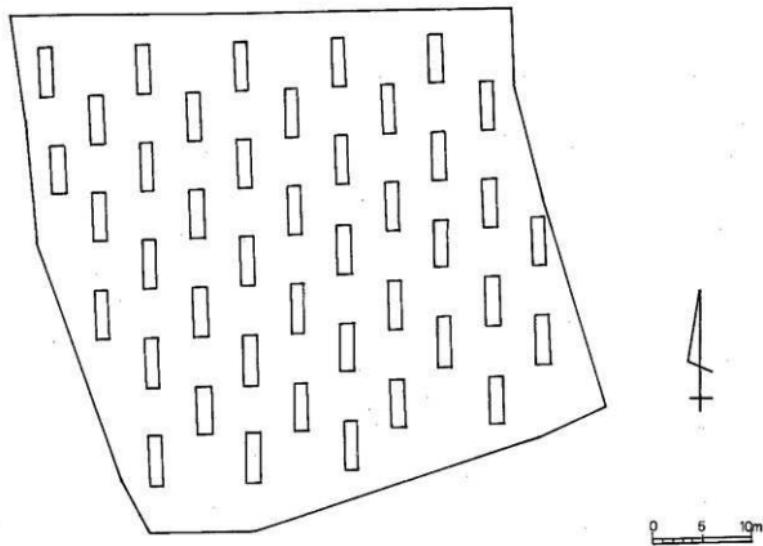
で、6月27日方眼杭及びトレチ設定、6月28日～7月2日人力による遺構確認及び包含層調査2～4日重機による表土除去、5～11日表土除去後の遺構確認及び包含層調査、11～12日下層確認調査、12日基本層序等実測作業後、機材撤収を行い調査を終了した。調査終了後に重機による全体の埋め戻しを行った。

調査の概要

本遺跡の基本層序は、大きく調査区北側の谷部分、中央及び南側の緩斜面に分けられる。谷部分では、Ⅰ表土（根等による攢乱層）、Ⅱ黒色土（腐食土層）、Ⅲ褐色土（新期テフラ層）、Ⅳ暗褐色土、Ⅴ暗黃褐色土（ソフトローム漸移層）、Ⅵソフトローム層などになっている。台地緩斜面ではⅠ層下にソフトないしハードローム、部分的に粘土化したローム層が見られた。遺構確認作業は包含層の存在も考慮して、重機でⅢ層上面まで下げⅢ層以下を人力により掘り下げる。最終的にⅤ～Ⅶ層上面において遺構確認を行った。各トレチの確認面はソフトロームないしハードロームだが、その深さは人きく異なる。北側の谷部分においては90～130cmでⅢ層の厚さが20cm程度、Ⅳ層の厚さが30cm以上を測る。中央部では表土下30～40cmでハードロームとなっている。

調査の結果、遺構については検出されなかった。

出土遺物は、縄文土器で点数では60点と極めて少ないがそのほとんどが北側の谷部分に設定したトレチからの出土である。出土層位はⅢ層中～Ⅳ層上位で、Ⅳ層中層～下層には全くといっていいほど包含していない。時期は縄文早期（茅山式）、前期（黒浜式、興津式）、中期（阿玉台式）で早期片がその主体を占める。また、安山岩製の敲石が1点出土している。



第20図 ライノ作南遺跡遺構配置図 S=1:500

調査のまとめ

今回の調査では、ライノ作南遺跡の南側部分についてその様相を明らかにした。結果としては遺物のみの検出で、遺構は確認されなかった。本遺跡の主体部分では縄文前期（黒浜式）の集落がある程度の密度で展開していたことは前述した。今回の調査は主体部分の隣接地ということで、遺跡の展開がどこまで広がっているかという点において有意義であった。遺構が確認されなかったということで南側における遺跡の限界と結論づけることが可能であろうか。ただ、主体部分ではほとんど出土が見られなかつた縄文早期（茅山式期）の遺物がある点数まとまっていることは一考の余地がある。

6. 逆水遺跡



第21図 逆水遺跡位置図 S=1:2,500

遺跡の立地と概要

逆水遺跡は、新川を北に臨む舌状台地中央平坦面に立地する。標高約23mを測り、水田面との比高は約18mである。近隣の遺跡として南東に島ヶ谷遺跡南西に逆水西遺跡があり、逆水西遺跡では平成8年1月に確認調査、同年4月に本調査を実施し、弥生時代後期の住居跡4軒、弥赤加時代後期の土坑1基、中世の土廣墓17基を検出した（註1）。

調査区の現況は畠地で、本遺跡において過去に調査を実施した区域は無く、今回の発掘調査において初めて本遺跡の一部が明らかになった。

調査の方法と経緯

調査は調査区の形状にあわせて10m間隔に2×4mのトレーナーを設定し掘削を行い、遺構の検出状況を見ながら更にトレーナーの増設、拡張を行いながら遺構の捕捉に努めた。

確認調査の結果、遺構の検出状況と工事の工程との調整および協議の結果、一部保存、一部本調査との合意に達し、本調査対象区域については、引き続

き本調査まで実施し終了した。

調査期間は平成7年11月14日～平成7年12月13日で、11月14日～19日機材搬入、環境整備およびグリッド設定、19日～20日人力による包含層確認作業、20日～21日重機による表土除去作業、21日～22日遺構検出作業、22日～25日実測・写真撮影等記録作業を行い確認調査を終了した。26日～28日協議のため一時中断の後、29日～12月3日本調査対象区の重機による表土除去作業、4日～13日本調査実施、12日～13日機材撤収を行い、本調査までを終了した。

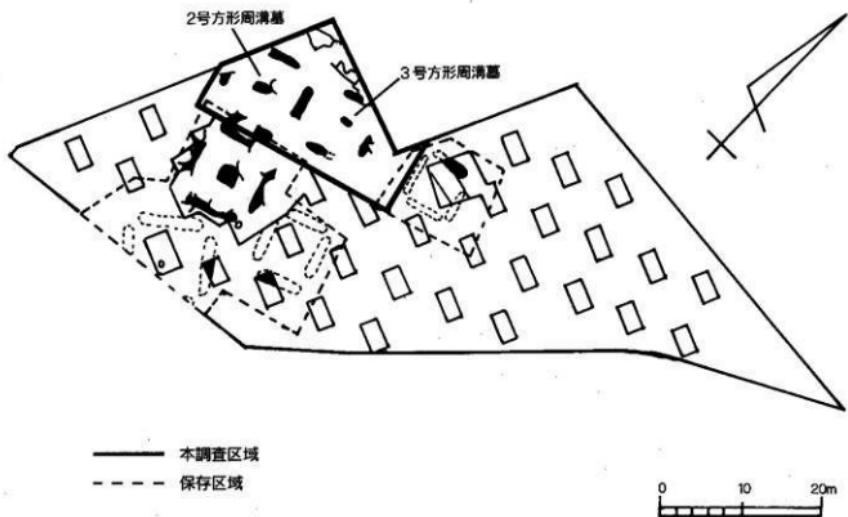
調査の概要

調査区の基本層序はⅠ表土層、Ⅱソフトローム層、Ⅲハードローム層、Ⅳハードローム層（AT層）Vハードローム層（第二暗色帯）となっている。遺構検出作業はⅡ層上面で行なった。擾乱が激しく表土層下に本来あると思われる黒色土層等は検出されず、表土層下がソフトロームになる層序で、表土から平均70cmでソフトローム上面となった。

調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓6基、時期・用途不明の土坑2基、時期・用途不明の溝1条を検出した。その内、本調査対象区域に位置する方形周溝墓2基と溝1条の調査を行い、他の遺構は保存措置を行なうこととした。遺物は弥生土器が少量出土した。旧石器時代については、1箇所4ml分のテストピットを調査したが遺物は検出されなかった。以下、検出された遺構のうち、本調査を実施した遺構についての調査所見を述べることとする。

2号方形周溝墓

調査区北側G-1グリッド（以下Gと略）に位置する。隣接の遺構として南側に1号方形周溝墓、東側に3号方形周溝墓がある。それぞれに重複関係はない。遺構検出はⅡ層上面で行なった。遺存状態は不良であった。



第22図 逆水遺跡遺構配置図 S=1:600

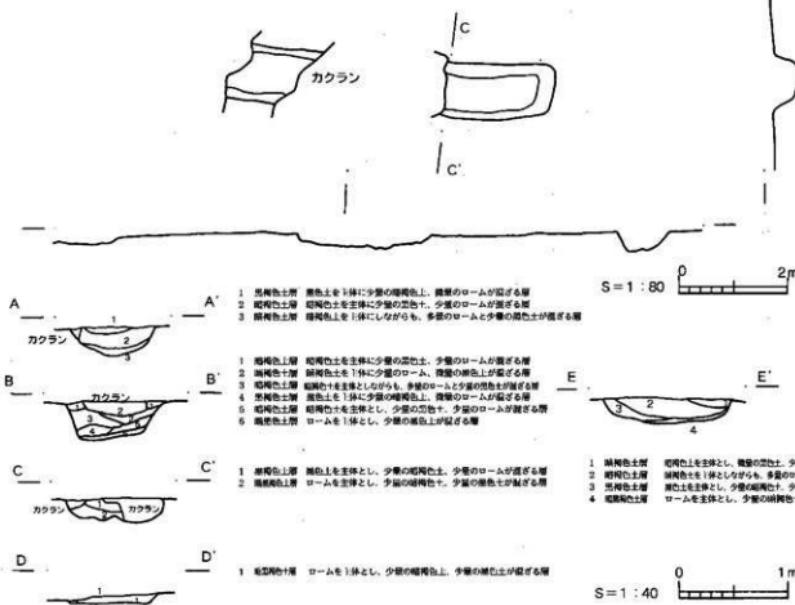
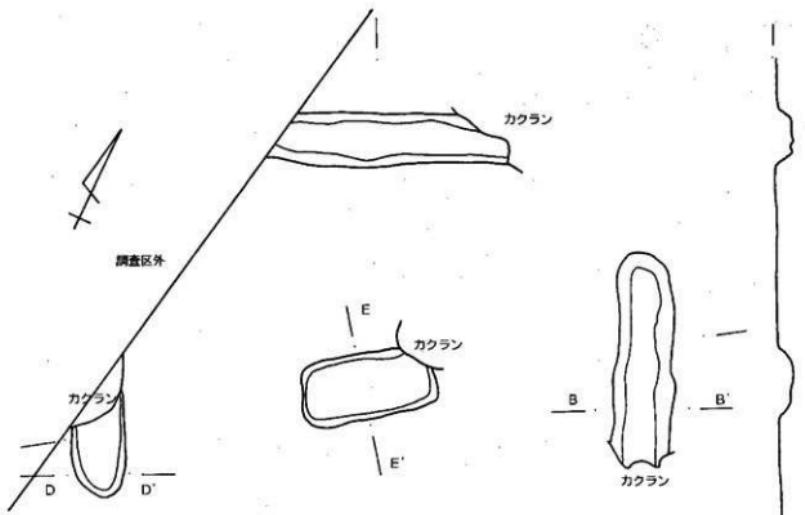
四隅に陸橋部を有し四溝からなる周溝墓で、規模は溝幅を含めて南北約8.3m、東西約8.7mで、台状部の規模は南北約6.8m、東西約7.1mを測り、方形の平面形を呈している。周溝はほぼ東西南北に配置されている（以下それぞれをN溝、E溝、S溝、W溝とする）。

溝はいずれも短軸断面がU字形で、長さは擾乱を受けているため不明である。N溝は、幅平均約80cm深さ約30cm。E溝は、幅平均約75cm深さ約40cm。S溝は、幅平均約85cm深さ約40cmで、四溝のなかでは最も掘り込みがしっかりした溝であった。W溝は、幅平均約80cm、深さ約15cmで、他の三溝と比べると掘り込みの浅い溝であった。いずれの溝も、底面は概ね平坦であるが、細部にいたってはかなり凹凸があり、溝掘削に際して強い規格性のある整形の跡は見受けられなかった。立ち上がりに関しては概ね斜めに直線的に立ち上がっていた。また土坑等の付属施設は検出されなかった。周溝内覆土は黒褐色土系の土を主体に数層に分層することができたが、いずれも自然堆積と思われる。

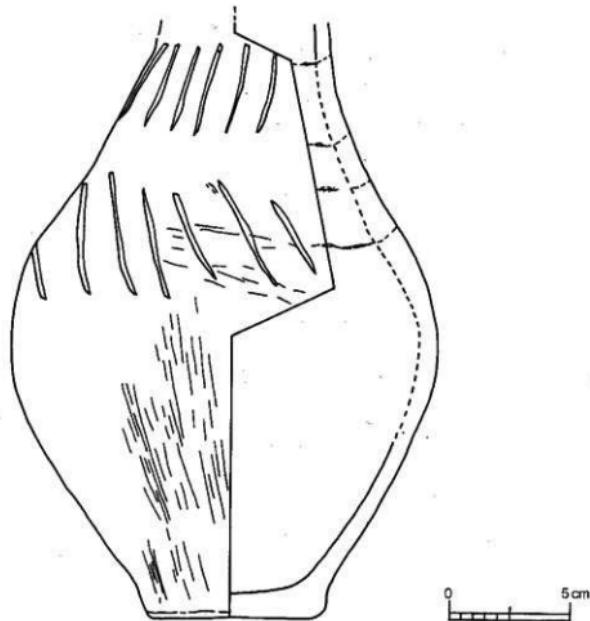
主体部は台状部のほぼ中央部に位置し、規模・平面形は一部攪乱を受けているものの、長軸1.9m短軸1.0m、深さ0.2mの隅丸長方形である。断面形状は船底形で立ち上がりは緩やかに斜めに立ち上がっていく。底面の状況は概ね平坦である。覆土はローム混じりの暗褐色土を主体とするが、いずれも人為的に一気に埋めたものと思われる。

遺物はS溝東側覆土下層より壺形土器の底部から頸部にかけての一箇体が倒れた状態で出土した。その他の各周溝から弥生土器の小破片が数点づつ出土したのみである。主体部から遺物は出土しなかった。

出土遺物、遺構の形状から、弥生時代中期の方形周溝墓である。



第23図 逆水遺跡2号方形周溝墓実測図



第24図 逆水遺跡 2号方形周溝墓出土遺物実測図 S=1:2

3号方形周溝墓

調査区北側H-3 Gに位置する。隣接の遺構として西側に2号方形周溝墓、北側に1号溝がある。それぞれに重複関係はない。遺構検出はⅡ層上面で行った。遺存状況としては良いとはいえない。

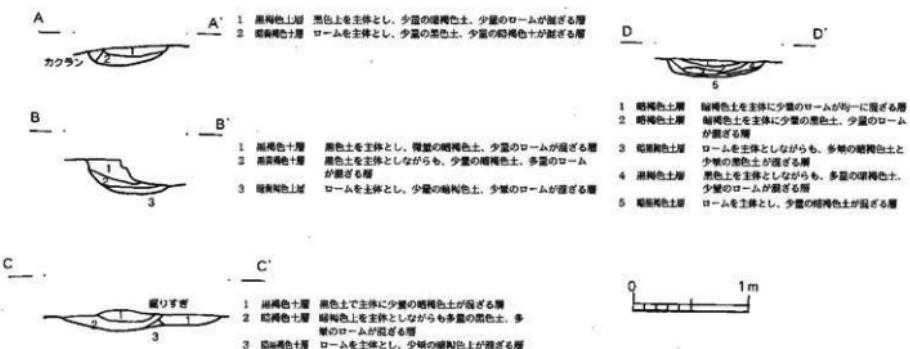
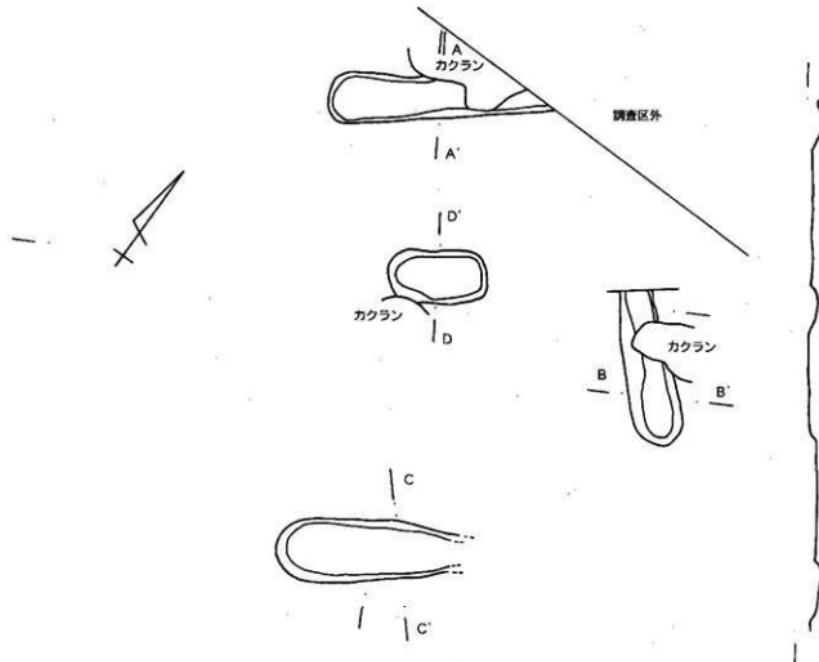
コーナーに陸橋部を有し、三溝からなる。但し、遺存状況から考えて本来四溝あったのかもしれない。規模は溝幅を含めて南北約8.7mで、台状部の規模は南北約6.9mを測り、方形の平面形を呈している。周溝は東南北に配置されている。

溝は、いずれも短軸断面がU字形で、長さは擾乱を受けているため不明である。N溝は幅平均90cm、深さ約30cm。E溝は幅平均90cm、深さ約30cm。S溝は幅平均110cm、深さ約15cmであった、いずれの溝も底面は概ね平坦である。立ち上がりに関しては斜めに直線的に立ち上がる。またいずれの溝に關しても土坑等の付属施設は検出されなかった。周溝内覆土はいずれも黒褐色土系の土を主体に数層に分層することができたが、いずれも自然堆積によるセクションと思われる。

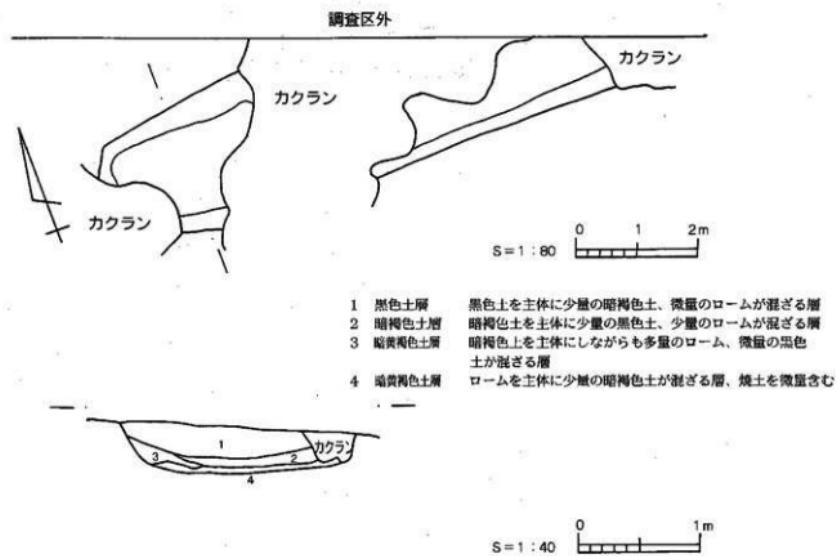
主体部は台状部の中央や北側に位置し、規模・平面形は一部擾乱を受けているものの、長軸1.8m短軸1.0m、深さ0.3mの隅丸長方形である。断面形状は船底形で立ち上がりは緩やかに斜めに立ち上がっていく。底面の状況は概ね平坦である。覆土はローム混じりの暗褐色土を主体とするが、いずれも人為的に一気に埋めたものと思われる。

遺物は主体部覆土上層から弥生土器小破片数点、周溝各覆土中から弥生土器小破片数点がそれぞれ出土している。

遺構の形状、覆土の観察等から弥生時代中期の方形周溝墓である。



第25図 逆水遺跡 3号方形周溝墓実測図



第26図 逆水跡 1号溝実測図

1号溝

調査区北側 I - 1 G に位置する。隣接の遺構として南側に 3 号方形周溝墓がある。遺構検出は II 層上面で行った。遺存状況は攪乱が激しく良くない。

溝幅約 2.2m、深さ約 0.4m で断面は台形を呈する溝である。底面の状況はほぼ平坦で、立ち上がりは斜めに直線的に立ち上がる。

遺構覆土は暗褐色土系の土を主体に数層に分層することができるが、いずれも自然堆積によるセクションと思われる。

遺物は覆土上層から下層にかけて土器小破片が数点出土したのみである。

時期・用途不明の溝である。

調査のまとめ

今回初めて当地域の調査を実施し、保存区域を含め、弥生時代中期の方形周溝墓を 6 基検出し、2 基を調査したわけであるが、規模、形態、配置状況から考えて、これらは単独で存在するのではなく方形周溝墓群として 1 つの墓域を形成するものと考えられる。また、この方形周溝墓群は 6 基にとどまるものではなくさらに調査区外に広がるものと考えられる。当地域において、弥生時代中期の墓域を発見できたことは大いに成果があったことと思われ、また今後この台地上で、この墓域に対応する弥生時代中期の集落跡を検出することが新たな課題になると言えよう。いずれにしても今後、周辺の調査例を増やし、あわせて考えていきたい。

註 1 遺構数については本調査の成果をふまえて記載してある。なお、確認調査の結果については、八千代市教育委員会「市内遺跡発掘調査報告 平成 7 年度」(1996年 3月 29 日)に記載。

7. 内込遺跡



第27図 内込遺跡位置図 S=1:2,500

遺跡の立地と概要

内込遺跡は新川の西岸にある。高津川は習志野演習場周辺を源とし、人和田の台地を迂回して新川に流れ込む。この中流域西岸の河岸段丘の低位段丘面上に位置している。標高は17m前後で、前面沖積地との比高差は4m程度である。

新川からここまで内陸に入り込むと、遺跡の密度は少なくなってくるが、隣接する区域で高津新山遺跡が昭和60年から平成2年まで6年間調査されている。遺跡の概要是旧石器時代、縄文時代前期から晩期、古墳時代前期・後期また平安時代、中世など多時期にわたって営まれていた。現在整理中である。

調査の方法と経過

調査は、区域の形状に合せて10m間隔にグリッドを設定し、それぞれのグリッド内に2m×5mのトレンチの掘削を基本とした。遺構の検出状況などで随時拡張を行い、遺構の規模・性格等を明らかにするよう努めた。

調査期間は平成8年12月10日から17日まで実施

した。10日～11日機材搬入・方眼杭設置・トレンチ設定等準備作業。一部手掘りにより包含層調査や重機による掘削のための準備を行った。12日は重機によるトレンチ掘り。13、16日～17日で遺構のプラン確認・セクション実測・写真撮影など記録作業を行い、最後に機材の撤収をして終了した。

調査の概要

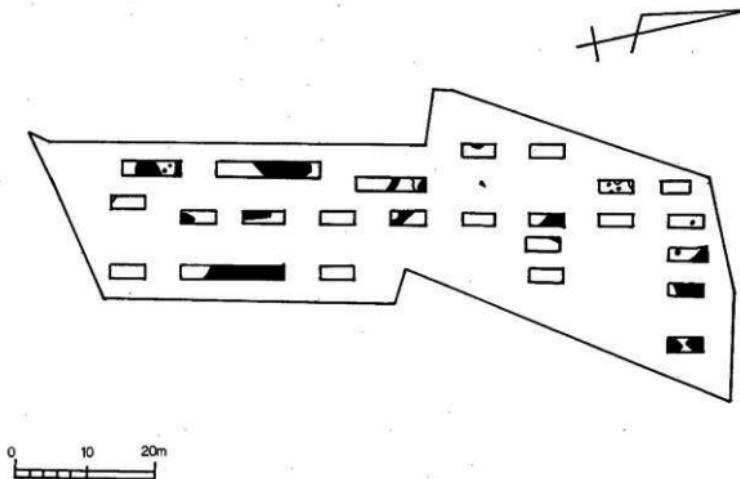
耕作が行われていたため、この辺一体の土層は耕作土がほとんどである。しかし、それでもやや表土の深いところでは黒褐色土の形成されていたことがうかがわれた。そのため、遺構確認はローム層上面で行われ、深さは南側の深い所で30cm前後、北側のやや深い所でも50cm程度であった。

遺構の多くは黒褐色土の覆土で形成されている。大きいもので12m程の住居跡が想定されるものが1軒確認される。また、7m程の大きさの住居跡が一般的のようであり、5軒確認されている。一部のみの検出で大きさは推定できないが2軒確認される。住居跡の深さは50cmほどのものが多いが、一部に70cmを測るものも見られる。その他黒褐色土の覆土の2m程の規模の上坑も検出されている。ピットで良好なもの4基、溝2条、他にトレンチャによる遺構の形状がわからなくなつたものなどもある。

遺物は古墳時代土師器がほとんどを占めている。後期鬼高窓のものである。平安時代の上師器、須恵器も若干出土する。縄文時代の遺物は中期（阿玉台期）のものがわずかに出土している。また、黒曜石の石鏃が1点出土している。

調査のまとめ

住居跡の大半は古墳時代後期の鬼高窓のものと推定されるが、縄文時代中期や平安時代の遺構も検出される可能性を残している。高津川のこの低位段丘面一帯にはおそらく鬼高窓の集落の展開が予想される。しかし、この段丘面に営まれる傾向は、すでに隣接の高津新山遺跡でも確認されており、近接するこの二つの遺跡の関係を明らかにしていくことが今後の課題となろう。



第28図 内込遺跡、遺構配置図 S=1:700

8. 二重堀遺跡



第29図 二重堀遺跡位置図 S=1:2,500

遺跡の立地と概要

二重堀遺跡は、新川の東岸、辺田前から東に入り込む谷の最奥部の台地上に位置しており、標高は約25mから27mを測り、西から東へ緩やかに高くなる緩斜面から台地平坦面にかけて立地している。

調査区は平成8年5月に確認調査を実施した地点の東側隣接地にあたり、過去の調査例等は、2. 二重堀遺跡の項を参照されたい。

調査の方法と経過

調査は調査区の形状に沿って10m間隔で2×4m規模のトレンチを設定し掘削を行い、遺構の検出状況を見ながら更にトレンチを追加設定し遺構の捕捉に努めた。また検出遺構が少なかったため、遺構調査まで行い終了した。

調査期間は平成9年2月28日～平成9年3月7日で、2月28日機材搬入及びトレンチ設定、2月28日～3月3日人力による包含層確認掘削作業、3月3日重機による表土除去、3月4日遺構検出作業、3月5日本調査を含む実測・写真撮影等記録作業、3

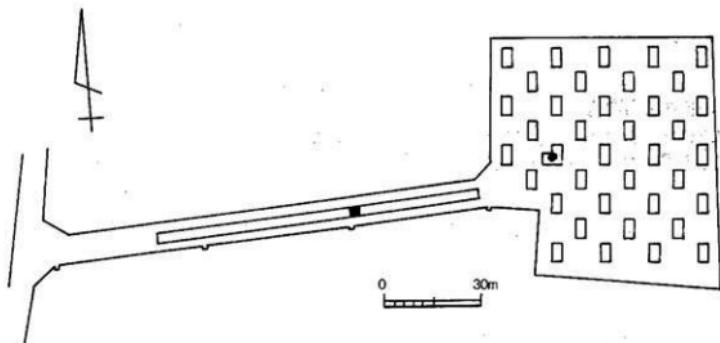


図30 第30図 二重堀遺跡遺構配置図 S=1:1,000

月6日機材撤収、3月7日埋め戻しを行い調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序はⅠ表土層（耕作土）、Ⅱソフトローム層、Ⅲハードローム層、Ⅳハードローム層（AT層）、Ⅴハードローム層（第二暗色帯）となっている。遺構検出作業はⅡ層上面で行なった。現況が畑のため、擾乱が激しく、表土下に本来あると思われる黒色土層等は検出されず、大部分のグリッドで、表土直下30cm程度でソフトローム層に達していた。

調査の結果、土坑1基、溝1条（いずれも時期・用途不明）を検出した。遺物は縄文土器を少量検出したのみで、遺構、遺物ともに密度は低かった。旧石器時代については3箇所12m²分のテストピットを調査したが、遺物は検出されなかった。

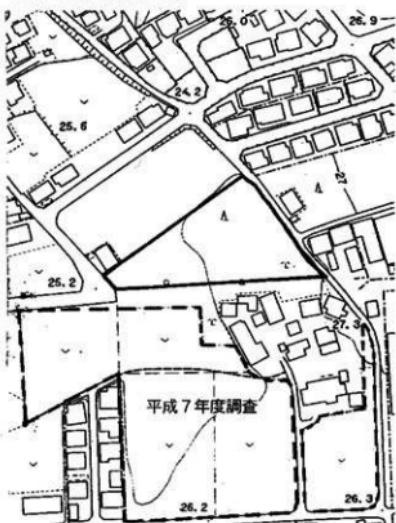
検出された土坑はC-4-1グリッドに位置し、激しく擾乱を受けている。遺構確認面はⅡ層上面である。平面形態は不整の梢円形で、長軸約1.5m、短軸約1.2mを測る。壁は斜めに立ち上がる皿状の土坑で深さは25cm程度で、底面の状況はほぼ平坦であった。小穴等の付属施設は検出されなかった。遺物も出土しなかった。

溝は幅1.5m、深さ50cmを測る断面U字形の溝で南北方向に伸びていると推定される。しっかりとした掘り込みを持ち壁は斜めに直線的に立ち上がる。底面の状況はほぼ平坦であった。小穴等の付属施設は検出されなかった。遺物も出土しなかった。

調査のまとめ

上高野地区においては本報告書においても4調査が掲載されている他、過去においても断続的に数度の調査が実施されており、遺物、遺構密度が薄い地区であることが明らかにされつつある状況にある。今回の調査においても例に漏れず遺構、遺物の密度は薄かった。このことは本地区が居住域から離れ、狩猟、採集等の場として利用されていたのであろう。いずれにしても今後の調査例を増やし検証を重ねてゆきたい。

9. 上谷津台南遺跡



第31図 上谷津台南遺跡配置図 S=1:2,500

ている。遺構確認はV層上面で行った。

調査の結果、遺構については検出されなかった。遺物は縄文後期（加曾利B式）の土器小片が少量出土している。

調査のまとめ

今回の調査区域は、1の項で概要を記した上谷津台南遺跡の北側隣接地にあたる。その調査においては落とし穴状遺構2基等が検出された。今回、遺構の展開がどこまで及んでいるかという点に着目して調査を進めた。結果としては、縄文時代後期（加曾利B式）の土器片が少量出土したのみで遺構は検出されなかった。地形は、調査区中央に北側からの谷があり、それを挟んで東西に台地が立地している。台地部分に落とし穴が展開する可能性が十分考えられた。結果として、上谷津台南遺跡の北側における限界といえるだろう。

遺跡の立地と概要

上谷津台南遺跡は新川と井野川にはさまれた台地のほぼ中央部にあり井野川に至る谷の最奥部、標高24～25mの台地上に立地する。

周辺の遺跡については、1. 上谷津台南遺跡の項を参照されたい。

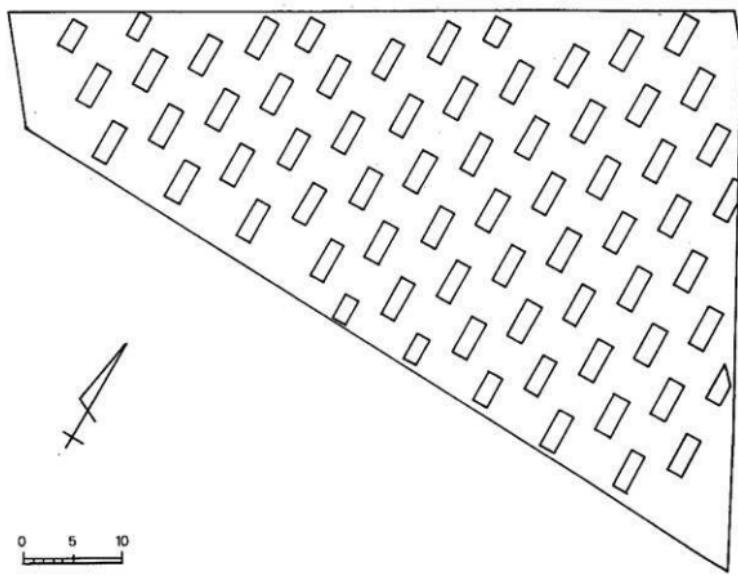
調査の方法と経過

調査は基本として磁北の方向で10m間隔にトレーニチ（2m×5m）を設定し、適宜その間にトレーニチを設け遺構確認を行った。

調査期間は平成9年3月7日～同年3月13日で、7日トレーニチ設定、10、11日重機による表土除去、10～13日遺構確認作業、下層確認調査等を行い調査を終了した。14日に重機による埋め戻しを行った。

調査の概要

本遺跡の基本層序は、Ⅰ表土（根等による擾乱層）、Ⅱ黒色土（腐食土層）、Ⅲ褐色土（新期テフラ層）、Ⅳ暗褐色土、Ⅴソフトローム層となつ



第32図 上谷津台南遺跡遺構配置図 $s=1:600$

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよししないいせきはくつちょうさほうこく へいせい8ねんど
書名	千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成8年度
編集著者名	秋山利光・森竜哉・富松成人・宮沢久史
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276 千葉県八千代市大和新田312-5 TEL. 0474-83-1151
発行年	西暦 1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 東經 度	調査期間	調査面積	調査原因	
上谷津台南遺跡	八千代市上高野 1105ほか	12221 229	35度 43分 15秒	140度 8分 30秒	1996.12.18~ 1996.2.2	3,266m ² /32,200m ² (54m ² 本調査)	土地区画整理
二重堀遺跡	八千代市上高野字新林 1120-1ほか	12221 231	35度 43分 10秒	140度 8分 3秒	1996.5.13~ 1996.5.28	500m ² /4,942.29m ² (32m ² 旧石器調査)	共同住宅建設
神久保寺台塚	八千代市神久保 字寺ノ台 70-1, 73-3ほか	12221 7	35度 46分 13秒	140度 5分 47秒	1996.5.30~ 1996.6.12	65m ² /130m ²	土砂崩壊防止工事
上ノ山遺跡	八千代市菅萱町 字上ノ山883-2ほか	12221 243	35度 43分 0秒	140度 6分 46秒	1996.6.6~ 1996.6.14	236m ² /2,354.68m ² (16m ² 旧石器調査)	共同住宅建設
ライノ作削遺跡	八千代市大和田新田 字貞光寺937-1ほか	12221 -	35度 43分 27秒	140度 4分 57秒	1996.6.27~ 1996.7.15	280m ² /2,800m ² (18m ² 旧石器調査)	宅地分譲
逆水遺跡	八千代市米木了逆水 1233ほか	12221 100	35度 45分 37秒	140度 7分 16秒	1996.11.14~ 1996.11.25 1996.11.29~ 1996.12.13	504m ² /2,414.59m ² (93m ² 堆肥化処理施設設置) 340m ² (木造面)	堆肥化処理施設設置
内込遺跡	八千代市八千代台北 17-14	12221 246	35度 42分 40秒	140度 5分 58秒	1996.12.10~ 1996.12.18	305m ² /2,340m ²	宅地分譲
二重堀遺跡	八千代市上高野 字二重堀1240-1ほか	12221 231	35度 43分 10秒	140度 8分 11秒	1997.2.28~ 1997.3.7	450m ² /2,750.03m ² (12m ² 旧石器調査)	宅地分譲
上谷津台南遺跡	八千代市上高野 字大野1305	12221 229	35度 43分 20秒	140度 8分 30秒	1997.3.4~ 1997.3.13	361m ² /3,613.50m ²	宅地分譲

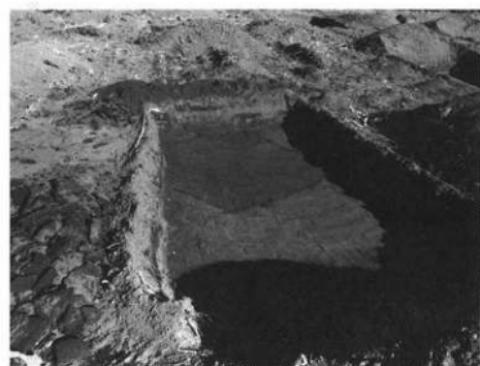
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺溝	主な遺物	特記事項
上谷津台南遺跡	散布地	縄文時代 奈良平安時代	落し穴坑2基 溝1条 1坑2基	縄文土器、石族、磨製石斧 奈良平安時代土師器	平成7年度調査
二重堀遺跡	散布地	縄文時代	無し	縄文土器	無し
神久保寺台塚	散布地	縄文時代 中・近世	埠状遺溝1基 土壘状遺溝1基	縄文土器	無し
上ノ山遺跡	集落跡	弥生時代	住居跡2軒 溝1条	弥生土器	無し
ライノ作削遺跡	集落跡	縄文時代	無し	縄文土器	無し
逆水遺跡	墓跡	弥生時代	方形周溝6基 溝1条	弥生土器	部本部調査
内込遺跡	集落跡	古墳時代	住居跡9軒 土坑7基 溝2条	古墳時代土師器	無し
二重堀遺跡	散布地	縄文時代	土坑1基 溝1条	縄文土器	無し
上谷津台南遺跡	散布地	縄文時代	無し	縄文土器	無し



1) 調査前現況



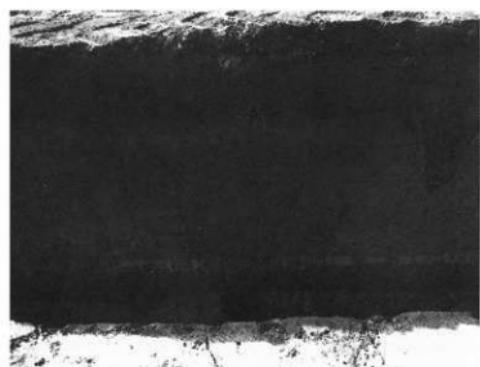
(2) 調査風景



3) 遺構検出状況



(4) 遺構検出状況

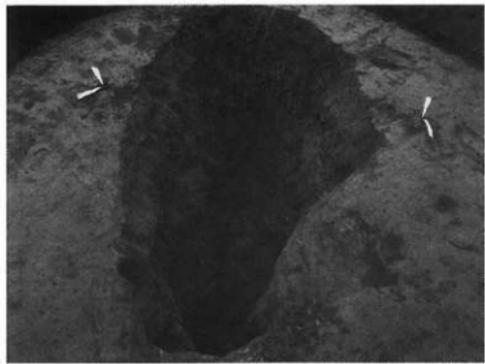


5) 土層断面（I-5 グリッド西壁）

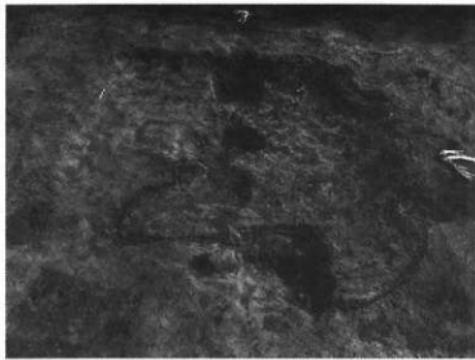


(6) 1号土坑完掘状況

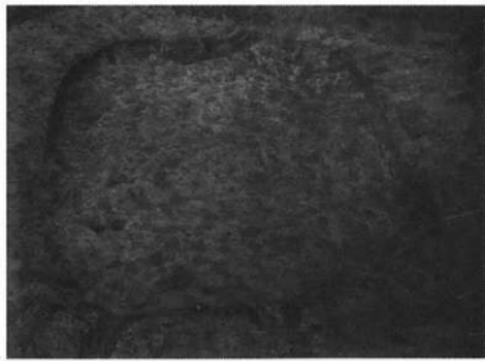
図版2 上谷津台南遺跡



(1) 2号土坑完掘状況



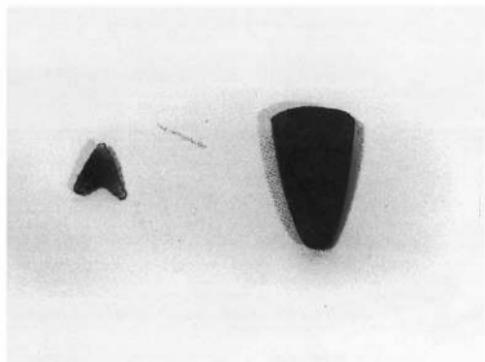
(2) 3号土坑完掘状況



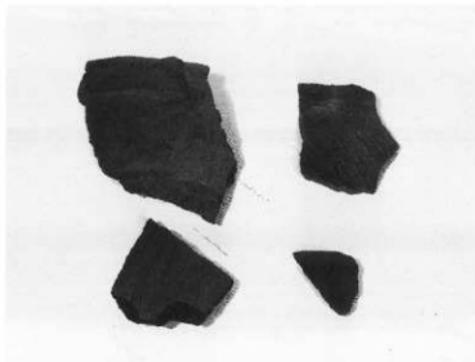
(3) 3号土坑完掘状況



(4) 1号溝完掘状況



(5) トレンチ出土遺物



(6) トレンチ出土遺物

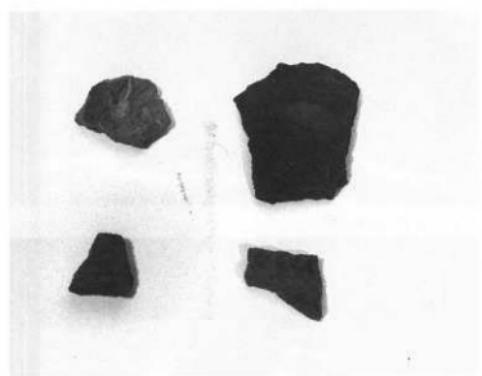
3 二重堀遺跡(1)～(3)・上ノ山遺跡(4)～(6)



1) 調査前現況



2) 調査風景



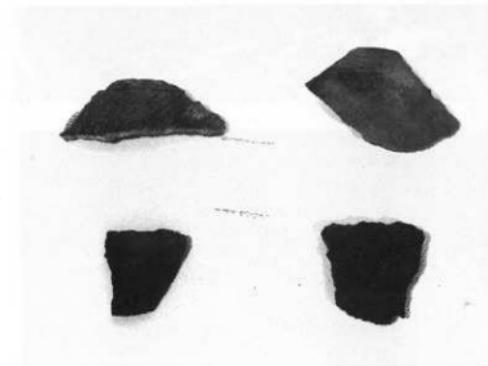
3) トレンチ出土遺物



4) 調査前現況



5) 遺構検出状況



6) トレンチ出土遺物

図版4 神久保寺台遺跡



(1) 調査前現況



(2) 調査前現況



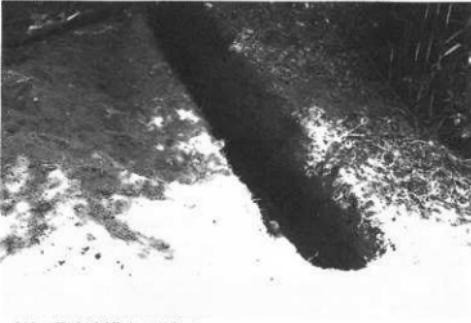
(3) 調査風景



(4) 塚状遺構現況



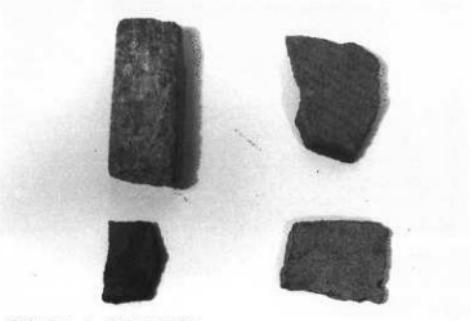
(5) 土壘状遺構現況



(6) 塚状遺構土層断面



(7) 土壘状遺構土層断面



(8) トレンチ出土遺物

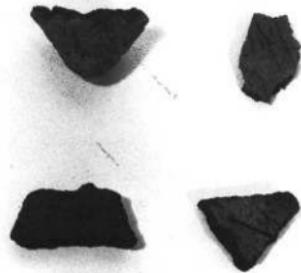
25 ライノ作南遺跡(1)～(3)・逆水遺跡(4)～(8)



1) 調査前現況



2) 調査風景



3) トレンチ出土遺物



4) 遺跡遠景



5) 調査前現況



6) 調査風景



7) 遺構検出状況

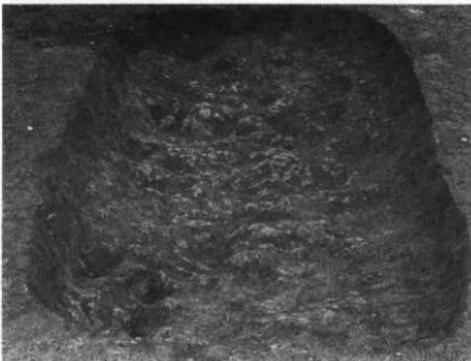


8) 2号周清墓遺物出土状況

圖版6 逆水遺跡



(1) 2号周溝墓完掘状况



(2) 2号周溝墓主体部完掘状况



(3) 2号周溝墓出土遗物



(4) 3号周溝墓完掘状况



(5) 3号周溝墓主体部完掘状况



(6) 完掘全景



(1) 調査前現況



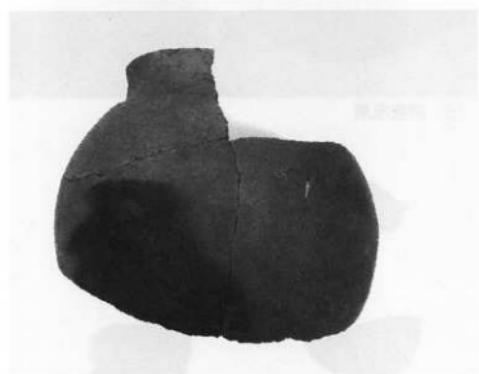
(2) 調査風景



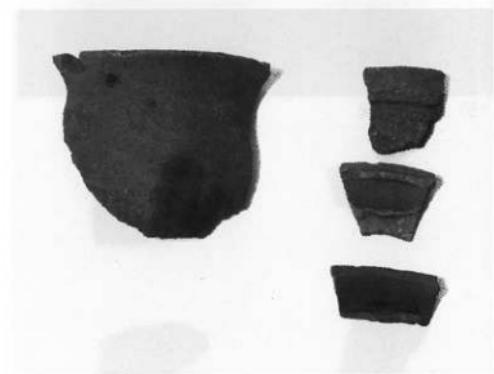
(3) 遺構検出状況



(4) 遺構検出状況



(5) トレンチ出土遺物



(6) トレンチ出土遺物

図版8 二重堀遺跡(1)～(4)・上谷津台南遺跡(5)～(8)



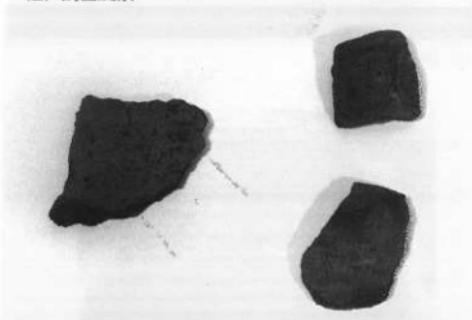
(1) 調査前現況



(2) 調査風景



(3) 遺構検出状況



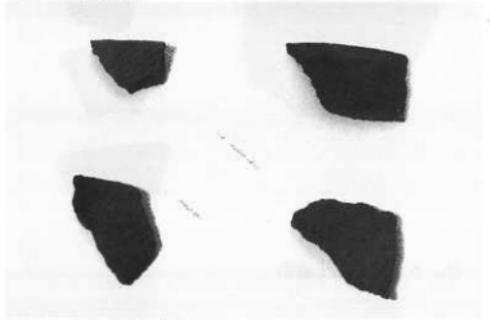
(4) トレンチ出土遺物



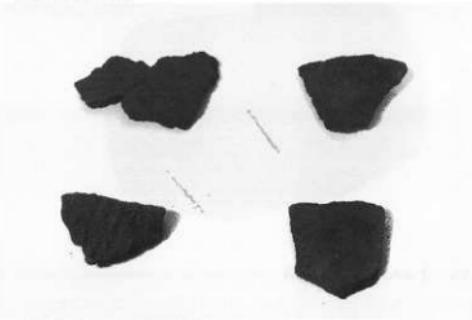
(5) 調査前現況



(6) 調査風景



(7) トレンチ出土遺物



(8) トレンチ出土遺物

調査組織

調査主体者 磯貝 謙吾（八千代市教育委員会教育長）

事務担当者 村越 利光（八千代市教育委員会生涯学習部長）
今井 利久（八千代市教育委員会生涯学習部参事兼社会教育課長）
川口 聖憲（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課副主幹）
小名木伸雄（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係長）
赤羽 克則（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係副主査）
秋山 利光（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事）
常松 成人（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事）

調査担当者 秋山 利光（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事）
森 竜哉（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事）
宮沢 久史（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事）

調査補助員 熟田さだ子 熟田 節子 阿部るみ子 石川 あき 石森 秀子 斎藤 千代
庄司 京子 鈴木 一代 鈴木 時子 立石 勝代 立石 春枝 立石ふく子
立石みね子 寺島 稲子 豊田 八重 平田三恵子 村越美津子 山口 栄子
山口 ひで 吉川 志代 小形 幸子 澤柳 安子 斎藤 文子 落龜 昌子
遠藤 玲子 小柳 英世 笠川千代子 斎藤 節子 東原 和男 原田 雪子
室井 恭子 矢尾ヤス子 伊藤イチ子 上田真里子 椎葉ケサエ 烏烟 文江
堀井 弥生 眞島 達志 松崎 栄子 渡辺 信子

整理補助員 川島すみ子

事務員 三宅由美子 田中 洋子

千葉県 八千代市
市内遺跡発掘調査報告

印刷日 1997年3月25日
発行日 1997年3月31日
発 行 八千代市教育委員会
生涯学習部社会教育課
〒276 八千代市大和田新田312-5
TEL. 0474 (83) 1151
印 刷 (有)八千代印刷